

「計画者」がマチづくりの現場に関わる ダイナミクスの実践知－ 立ち位置の見取り図としての 「モンダイ地図」の活用

岡田 憲夫¹・山 泰幸²

¹フェロー会員 関西学院大学顧問 災害復興制度研究所（〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原町 1-155）
E-mail: kyotookanori@gmail.com

² 関西学院大学教授 人間福祉学部 人間科学科（〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原町 1-155）
E-mail: bel12665@kwansei.ac.jp

「計画者」がマチづくりの現場に関わるときに違和感を覚えることがある。生きた現場に身を置くときの特有のダイナミクスがある。本発表では以下のことに着目する。計画者がマチづくりの現場に置かれた場合に、①役割の不明確性、②専門的価値の非自明性に直面する。③計画者の習性である「計画論的問題解決志向」をいったん留保することも求められる。結果的に計画者自身は、④立ち位置と関わり方の動態性を体験する。では、計画者はどのような立ち位置で地域に関わるべきか？本発表では、計画者が「モンダイ地図」をパターン認識することにより、自身の立ち位置を読み取り、関わり方を適応的に学習するアプローチが有効であることを例示する。岡田は計画学の研究者として長年にわたって鳥取県智頭町のマチづくりに関わってきた。共同発表者の山は社会学や民俗学の専門家としてフィールド研究の経験が長い。計画者と非計画者の実践知の相互検証も試みる。

Key Words: *Machizukuri, systemic dynamics, field work, planner, problem mapping, positioning capacity building*

1. はじめに

「計画者」がマチづくりの現場に関わるときに違和感を覚えることがある。生きた現場に身を置くときの特有のダイナミクスがある。本稿では、この点について筆者の体験も交えた具体的な事例も用いて論考する。本論に入る前に「計画者」とは何か？について少し言及しておく。より正確には、<「計画者」がマチづくりの現場に関わる>と言ったとき、その「計画者」とは何か？誰なのか？ということである。「計画者」の一般的な定義や役割の議論の詳細に立ち入ることは控えたい。本稿の議論の目的に外れるだろうし、既にこのテーマだけで多くの研究や制度的解釈があるからでもある。ただ下記の二点を指摘しておく。

たとえば米国では、American Planning Association (APA)²が「計画者」を”planner”と呼称し、公的に認知された professional と位置づけている。この planning association は

registered planner として登録する組織でもある。APA の下部機関として、professional に特定した certified planner をメンバーにした機関 (American Institute of Certified Planners=AICP)³がある。この活動も着目に値する。

一方、我が国では著者の知る限り、planning association に相当する組織と専門家(職能)としての planner の公的位置づけが欠けているようである。注目されるのは、米国では州や地域コミュニティへの役割貢献を明確化している点である。

planner を育成する大学教育機関と教育プログラムも、米国では多様性を許容しつつも体系化されている。たとえば岡田がかつて共同研究をしたパートナー機関である University of Oregon では下記のような教育・訓練プログラムを提供している⁴。

The School of Planning, Public Policy and Management (PPPM) has been offering training in rigorous, professional programs for more than 30 years. We are a national leader in community and regional

planning, public policy and administration, and nonprofit management. Our graduates work around the world for national, state, and local governments; for nonprofit organizations; and in the private

2. 本論における「計画者」の限定的位置づけ： マチづくりの方法論的計画者

(1) 本論者における「計画者」とは？

これまで我が国で主流であり、重視されたきたトップダウン型、行政・専門家主導型アプローチでは、「計画者」は自明すぎて、実は盲点であった。責任をもって計画を担う(中核の)主体は行政・専門家であった。21世紀に入ってからは、「(計画によって影響を受けるだろう)住民や利害関係者などの関与を前提とした参加型アプローチ」も重視されてきた。導入と実施を前提とした事業計画・運用も珍しくなくなってきた。しかし、21世紀前半期を迎えつつある今や、「計画によって影響を受けるだろう住民や利害関係者」から、「計画の質の向上に寄与しうる住民や関心の共有者」と見なす発想転換が不可欠である。そうすると「計画者」は、計画を担うすべての関係者・貢献者にまで拡大しうる。計画の当事者と間接的関与者と言い換えることもできるかもしれない。

このような「計画者」の拡張可能性を明確に認識した上で、以下の論考では、敢て「計画者」を「研究者」であり、かつマチづくりの現場に関わることを志向している「計画者」に限定して議論したい。冒頭に述べたように本論は、『<「計画者」がマチづくりの現場に関わる>』と言ったとき、その「計画者」に論点を置くためである。そこで計画学のシステム論的枠組みの拡張を目指す目的から焦点をもう少し絞り込むことにしよう。

(2) 方法論的計画者：Problem-oriented approach を前提にしたアプローチとその超克の可能性

計画学ではある意味共通理解が得られているであろう「問題志向型アプローチ」(Problem-oriented approach)となっている^{5,6)}。そこではこの不ブローチを本研究の前半部の議論の前提(premise)とする。「計画者」は「問題志向型」であり、その問題の解決や解消に専門的役割を果たすことを目指しているマチづくりの actor の一人である、と見なすのである。

本論者の後半部では、岡田のさらなる内省(reflective thinking)と、共著者である山泰幸との協働の critical thinking により、前半部の premise 自体を括弧でくくる。そこを超克したマチづくりとそこへの関与の仕方を模索することにしたい。

(3) 計画者がマチづくりの現場に置かれた場合の挑戦課題

計画者がマチづくりの現場に置かれた場合に、①役割の不明確性、②専門的価値の非自明性に直面する。③計画者の習性である。-「計画論的問題解決志向」をいったん留保することも求められる。それにも関わらず、ここでは当座(前半部)は problem-oriented approach という方法論的計画者を前提にしようとする。ここに矛盾があるようだが、岡田はこれを“problem”の構造的多様性という視点から、回避する試行を実際現場で重ねている。その紹介をする。まず構造的多様性を持った“problem”を「モンダイ」と表記する。着眼点はマチづくりの現場に立ち入るときのガイドマップ(コンパス)として以下の「モンダイ」を地図として使うのである。できるだけ道に迷わないためであり、迷ってもその経験から学ぶノートとして使うのも良い。

(4) マチづくりの「モンダイ」の三分類

a) 「#1 モンダイ」=「問題」(gate problem)

計画者がマチづくりにおいて、たとえば交通工学の「専門家」としての知見を提供することが求められるときが該当する。狭義の専門家は、「門を構えている人」であり、その「門」に掲げた専門性で、門に入ってくる人に対処する人だと言える。従来から、行政や企業などから「問題」の解決を求められてきた。今後も、このようなニーズとサービスは重要であることに変わりはない。ただ、マチづくりにおいて、このような「問題」が「専門家」に持ち込まれるケースはまだそれほど多くはないように思われる。誰が、どのようにして「問題」を「専門家」に持ち込むのか、その専門知をどう価値づけするかも含めて、体系化が進んでいないことも要因であろう。

b) 「#2 モンダイ」=「問題」(rotary problem)

これはマチづくりの総合的・包括的特性から見て、きわめて需要の大きいケースと判断される。「マチづくりの現場」を「ロータリー広場」にたとえてみよう。そこに多様で多彩な専門家がそれぞれの「門」につながる街路として放射状に延びている図式をイメージしよう。個別の専門知と、それを総合・融合するシステム論的知が出会うコミュニケーションの知とその実践が求められる。実は 20 世紀において主流であった行政・専門化主導の計画においてこのようなロータリー広場型のアプローチは、委員会・審議会型モデルとして発展してきたとも言える。しかし「マチづくりの現場」において、より水平的なコミュニケーションの知の生成をどのように行うかはいまだ十分に解明されていない。そもそも、制度化・定型化が進んでいない中、そのようなより「水平的なコミュニケーションの知の生成の場」をどのようにデザインすればよいのかはまだ研究の途上についたばかりである。なお Okada

and Goble^{7,8)}は「コミュニケーション・スペース」という概念モデルを提案し、まちづくりのデザインの要の一つとしている。この点については、後述する。

c) 「#3 モンダイ」=「問題」(maze problem)

このような迷路的モンダイに近づいただけで、住民も行政も、計画者としての専門家も立ち位置がふらつくような不安定感を味わうことになる。特に「計画者」がまちづくりの現場に関わるときに違和感を覚えることがある。心構えもなく、迷路的モンダイの中に入り込むと、すべての人は行く先や出口が見つからず「迷子」状態になってしまう。迷路的モンダイの周縁や内部にアプローチするとはどのようなことなのか？

(5) システミックなダイナミクス

「専門家」が、統制可能な「ホーム・システム」から生きた現場に身を置くときに接する特有のダイナミクスがある。これを Okada⁹⁾は「アウェイ・システム」に働き、「システミックなダイナミクス」としてとらえることが有効であると論じている。その特徴は以下のようである。

- i) まるごとの小さな全身体性を持った生きた地域コミュニティの内部と外部からの律動性と人々や事柄の関係性の束が醸し出す動特性
- ii) まるごとの小さな全身体性を包含する、より大きな全身体性を持った「地域 region」、さらにそれを包含する「広域 greater region」などから特徴づけられる全身体性の多層性
- iii) 数理的複雑性の動特性が働いている。①経路依存性、②バタフライ効果、③フラクタル特性、④systems of systems のネットワーク動特性などである。

Okada⁹⁾は小さなコミュニティの取り組み能力(coping capacity)の向上を図るときに、このような「システミック・ダイナミクス」が作用することを指摘している。

後述するようにまちづくりの実際の現場では、「#2 モンダイ」と「#3 モンダイ」の厳密な区別は難しいようである。計画者を含めた関わる人たちの中で、「モンダイ」認識の違いや互いの関係の距離感がある場合が少なくない。このとき、「モンダイ」への立ち位置(ポジショニング)と、コミュニケーションの場の生成が変容する。

「#2 モンダイ」で築かれた協働のコミュニケーションの場が、実は「#3 モンダイ」への準備過程の場づくりともなり得る。「コミュニティ」に軒を出した協働のコミュニケーションの場が巧まずして「#3 モンダイ」のモンダイ解消になりうる。この点については、次の実証例で確認しよう。

まちづくりに立ち入ることによって計画者自身は、立ち位置

と関わり方の動態性を体験する。では、計画者はどのような立ち位置で地域に関わるべきか？以下では、計画者が「モンダイ地図」をパターン認識することにより、自身の立ち位置を読み取り、関わり方を適応的に学習するアプローチが有効であることを例示する。

3. 岡田の体験 (智頭参入プロセス)^{10,11,12) 13)}

(1) 地域集落の有志グループかに地域参入への「誘い」を受けるシステミックなダイナミクス

1988 年ごろ、岡田は鳥取県智頭町の住民グループ(智頭町活性化プロジェクト集団=CCPT)からの訪問を受ける。地域計画の専門家として『智頭町の人口が減るのを何とか止めたいという「総合問題」』(ロータリー)を住民とともに解く糸口づくりの依頼を受けた。

岡田は大学の研究室でチームを作り、智頭町八河谷地区での調査を実施。地域の状況を「客観的」に観察、システム論的に多角的に分析する。報告会を地域の公民館で行う。

結論として、CCPT がテストケースとして取り上げていた智頭町八河谷地区の人口が減るのを何とか止める見通しは「客観的にみて」立てられない。

専門家ならではのアイデアや方策で『智頭町の人口が減るのを何とか止めたいという「総合問題」』に妙案が示されるかもしれないと期待して参集した村人たちは、岡田の報告を聞いて肩を落として帰路についていった。岡田はその姿に接して自身のこれまでの研究アプローチに根本的に何か欠陥がある。発想転換が不可欠であることを悟った。

(2) まず研究者自身が変わることを決意して実行していく

その日を境に岡田は、「コミュニティの体質改善」により「住民の生き抜く力」を少しずつ高めていく研究を進めることとなった。人が変わっていくことにつながり得る小さな対策を作業仮説として立て、この有効性を社会実験的に地域の人たちと一緒に見出していく研究アプローチである。(これは今では「適応的ガバナンス」といわれるアプローチに相当している。岡田はまちづくりの適応的ガバナンスのモデルとし SMART governance を提唱している。^{12,13)})

(3) 関わる人は皆(住民有志も、直接影響を受ける住民や他の関係者も、外部から関わり入る研究者も)〈少しは”変わる”〉プロセスに参画するまず研究者自身が変わることを決意して実行していく

以下では、状況ごとと発せられた「発話」(utterance)を採取して臨場感と転換のポイントを伝えることを試みよう。

- ・ 何とかしてほしい? 何とかしてほしい! 「何か」で「何?」
- ・ 専門家(外部の人)も良く分からない. けれども何とかしてあげたい. 何とかしてあげたい. 「何か」で「何?」

私たちはみな「悶題」=迷路の中に入りそう!!

- ・ 先に進むのであれば、私たちはみな(住民も、役場の人たちも、研究者も)、いつもの Home System からはみ出ていかねばならないようだ. はみ出た先には勝手に全く違う Away System があるようだ.
- ・ 住民も専門家も、行政も一緒になって迷路を探検しながら、新しい出口を見つけよう!!

(5) 智頭町で生まれた「軒のコミュニケーションの場」の実際例

詳細は岡田¹¹⁾, Okada^{12),13)}の著書と研究論文に譲るが、主要なものを挙げると以下のようである.

- ・ 1990 年ごろ 杉の木村 CCPT 集会の場づくり (cedar cottage)
- ・ 1995 年ごろ 地域科学の出会い館
- ・ 1995-2005 基礎集落レベルは、日本ゼロ分のイチ村おこし運動 地域協議会の場づくり
- ・ 2005-2015 日本ゼロ分のイチ村おこし運動の基礎集落レベルから地区レベルへの進化
- ・ 2020 以降 Post ゼロイチ: 民間イニシアティブによる軒のコミュニケーションの場づくりへと進化しつつある (例 新規参入者の経営者によるタルマリー二号店開設, その他, 市民有志による宿泊施設兼レストラン兼コミュニケーションの場づくり)

4. 地元の人たちから招待・誘いが無い場合に、計画者はどのように生きたマチづくりの現場に立ち入り、関わる事が可能なのか? 関わるのは適切か?

(1) 今(2022 年ごろ)に岡田が初めて鳥取県智頭町のマチづくりに関わりといたら

上で紹介した岡田の経験は 1980 年後半に遡り、地元の住民有志から「地域参入の依頼」があったところから出発している. いわば地元の人たちから招待・誘いがあったことを前提に話を展開している. よって、それがなかったらどうかということには直接に答えるものではない. ただ実体験と全体の経緯を知るものとしては、上述したように「軒のコミュニケーションの場」がかなり整いつつある中では、計画者が外部から参入するきっかけ

を見つけるのは比較的容易ではなかろうかと推察する. ただ方法論的計画者であることに固執して、モンダイ探しを主務としようとすると、さらに内部へと参入する機会を失う可能性があることを指摘しておきたい. この点については、次節において言及する.

(2) 飯田市のまちづくりの現場へ参入できるまで(岡田と山の体験)

岡田は 2012 年頃から単独で、山とは 2019 年頃から共同で飯田市のまちづくりの現場を訪問し、活動の様子とこれまでの経緯について学ぶことを主旨として関わりを築くことに努めてきた. 最初は地域の有力な関係者が紹介役を担ってくれた. その方のご厚意で飯田市の公民館活動に長年携わった来たキーパーソンと知己を得た. その後、幾度と訪問を重ねていくうちに次第に コミュニケーションが深まって、より地域の実情を知るキーパーソンと知り合う機会が増えている. 訪問の度に、筆者たちは「問い」を持ってコミュニケーション糸口を見出す努力を積み上げて今に至っている. おそらくこれは智頭町の体験とはかなり異なるものとなる予感がある. 良く知られる飯田市の公民館方式は「軒のコミュニケーションの場」と類似性を持つのか? それともまた別の種類の「コミュニケーションの場」と見なせるのか? 共通の本質的な働きは、コミュニカティブ・スペースなのかも含めて、地域の方とともに長く観察・確認していくつもりである.

5. Problem-oriented approach (モンダイ志向による接近法)だけではない.むしろ Question - sensitizing approach もマチづくりへの関わりにも重要ではないか?

(1) マチづくりの進化と岡田と山の critical thinking

これまでは主として岡田の「モンダイ志向」のアプローチを説明した. しかし、「モンダイ志向」だけが有効な接近法であろうか?、「計画者の習性から陥る見落としや盲点はないのか?」この点に触れておきたい.

本稿の共著者である山泰幸(社会学, 民俗学)は、第一著者の岡田(計画学)とはまったく異なる専門性をベースにマチづくりに関心を持ってきた. 山は哲学カフェなどを長年にわたって続けてきた. 山によれば、これも「マチづくり」への関わり方だという. しかしそこには「モンダイ志向」から始まるという発想はない. ただ「問い」(question)はある. 皆が共通のキーワードを「問い」と受け止め、問いの意味内容をめぐって自身が内省する(reflect)の機会とする. 思いを巡らして(think through して)ことばで表現する. 同じ場に居合わせた人たちは良き聞き手として他者が表出したメッセージを受け止める. 共

通の問いに対して多様な「意味」や「価値」が認められることを参加者は体感する。

計画者である岡田は応答する。「これがマチづくりとどのように関連しうるのだろうか？」山の解説と岡田の実験を踏まえて、二人が共通に見出した見解はこうである。

共通の「問い」は何であれ、普段はあまり掘り下げて考えることのない特定の問いを介して、reflective な態度でその場に接し、ことばを見つけながら think through する。「このような場」が生まれることを通じて人々は自身のマチや今の時代に生きていることの意味や意義 (sense-making) や価値づけ (value creation) に表現や形を与えることにつながる可能性がある。このような営みを繰り返すことは結果として自分たちが今を生き、未来にも生き続けることに見えない形を与えるというマチのデザインを、各自が他者と「その場」を共有することでできる。そのように解釈できるのではないか? («このよう場」, 「その場」については後述する>

岡田と山の二人は共同でこのような critical thinking を重ねた結果、以下のようなマチづくり(への関わり方)の可能性をひろげる論題を見い出した。

“Problem-oriented approach (モンダイ志向による接近法) だけではない。むしろ Question -sensitizing approach (問いから気づく接近法) もマチづくりへの関わりに重要ではないか? 災害からの地域復興を目指したマチづくりには既にそのような実例が生まれつつある。”

これからの災害復興を目指したマチづくりでは、Question -sensitizing approach の方が本質的で的確な接近法となりつつあることを指摘しておきたい。筆者たちが関わり、何度も訪ねてきたいいくつかの地域(鳥取県智頭町、熊本県被災地域など)がある。そこではそのエビデンスが生まれつつあることを確認しつつある。そこでは市民の方が既に過去の常識にとらわれない、創造的な取り組みを始めている。なぜそこで住み続けるのか? より本質的で根源的な「住み続けることの意味と価値への「問い」から始まり、そこに返っていくプロセスの萌芽が認められるのだ。

(2) 「コミュニケーション・スペース」へと概念化を高める

本稿では、「マチづくりを小さく始め、育てる」ためには共通のコミュニケーションの場が不可欠であることを指摘した。このような共通の場を Okada and Goble(2020)はコミュニケーション・スペースという概念モデルとして次のように提唱している。



図-1 出会う場が生まれることから始まる BECAUSE Model¹⁾

- ① 日常とは異なる形で関心のある人々が自発的に meet することを繰り返す。人々が meet し続けることで新しい発見や共通認識が生まれる。このような場は外部の人や専門家にも基本的には参入可能で open な場とする。
- ② 互いに共同・協働で問題解決するためのコミュニケーションを繰り返し、最終的には小さな行動実践の足掛かりの場とする。
- ③ meet の場が次第に安定して固定した時点で、内部の決め事の概要や決め方のルールなどを対外的にも説明可能なように整える(組織のありようについての legitimacy の担保)。

岡田は拡大・四面会議システム(YSM version 2)が「コミュニケーション・スペース」を立ち上げていくときの場づくりのツールとして有効であることをいくつかの事例に即して示している。そのプロセス・モデルとして BECAUSE Model が適用可能であるとしている(図-1 参照)。四面会議システム(YSM version 1)¹⁰⁾は、主として上記の②の段階の場づくりを前提にしていた。しかし、YSM version 2 (Okada and Goble⁸⁾)は①の段階から始めないと、場づくりが適切に生まれないケースが少なくないことを考慮して拡張。改善されたものである。Question -sensitizing approach から始めるマチづくりはまさに①の段階のコミュニケーションの場づくりの重要性に呼応していることを指摘しておきたい。

6. むすび

本論考で指摘したように、今後の「マチづくり」では生きた地域への関わり方には進化が求められる。

本稿では、「計画者」をまず Problem-oriented approach を取る方法論計画者として論考した。後半では、別の方法論として Question -sensitizing approach を取り得ることも言及した。であれば、方法論計画者の「方法論」もあくまで状況依存的で、互いに相対化しうるはずである。

双方の方法論もコミュニカティブ・スペースの生成と展開のプロセスの中でつながっているとも言える。

計画者であれ、非計画者であれ、「マチづくり」は新鮮な研究テーマの宝庫である。そして多様な専門性と協働性、そして何よりも、ことばへの感受性に気づいたコミュニケーション力が求められるであろう。この点も含めて今後の継続的な研究で検証していきたい。

付録 システミック・リスクをリスク論的に探究するアプローチ

本稿では「システミック」を「全身的に絡み合った関係」の原義に着目して捉えてきた。「マチづくり」の生きた現場を特性化するには、システミックな思考やパースペクティブが有効であることを説明してきた。これに対して、特にリスク論的研究を方法論とする研究開発と応用分野では、むしろ「システミック・リスク」の特性に着目した議論と研究成果が積み上げられている^{17),18)}。

(前年度(2021 年度)第 64 回土木計画学研究発表会・秋大会で岡田¹⁹⁾が既に指摘しているが、参考として以下、もう一度復習しておきたい。)

- ① 複数のシステムがつながっていること (interconnectivity between systems)
- ② 複雑性とダイナミズム(complexity and dynamics)
- ③ 高度の不確実性(high uncertainty)
- ④ 予見不可能で回避可能な破砕的ショック (unforeseeable and unavoidable disruptions)
- ⑤ パラダイム・シフトが求められる思考、システムの諸要素から人々の行動の集合的相互作用、相互作用から生まれる創発性のあるシステミック特性へ着眼点を移すこと (a paradigm shift in our thinking, moving our attention from the properties of the system components to the collective behaviour and emergent systemic properties resulting from the interactions of these components)

上記の諸特性はシステミックな思考やパースペクティブをとる場合の着眼点を示していることに留意しよう。このような特性や状態のもとで潜在的に存在したり、顕在化するリスクをシステミック・リスクと見なしているのである。なお「複数のシステムがつながっていること」については、システム工学の分野では systems of systems という先端的テーマとして研究が進んでいる¹⁹⁾。

このようなアプローチからシステミック・リスクが招く途方もなく大きく広がり、多重・多層的に絡み合うシステミック・リスクの世界 (systemic risk landscape) に知的創造の翼を広げることができる。しかし、現場で実践ということになると、どこから糸口を見つけてガバナンス

していけば良いのかとむしろ途方に暮れてしまうことにもなりかねない。またそのようなシステミック・リスクに向き合い対処していくには、ヒューマン・スケールのコミュニティ・組織の取り組み力 (coping capacity) を絶えず向上させていく方法を見出すことが現実的で効果的である。2. で指摘したように「生きたまるとのマチづくりの現場」は、たとえ小さくても生きたまるとであれば、十分すぎるくらいシステミック・リスクに満ち満ちているのである。

参考文献

- 1) 岡田憲夫: マチ (コミュニティ) が変わる・人が変わるための小さな協働実践デザインと進化する四面会 議システム-BECAUSE プロセスモデルの活用, 第 64 回土木計画学研究発表会・秋大会, 2021.
- 2) American Planning Association: website [American Planning Association](https://www.americanplanning.org/)
- 3) American Institute of Certified Planners: website [AICP \(planning.org\)](https://www.aicp.org/)
- 4) University of Oregon College of Design, School of Planning, Public Policy and Management website <https://pppm.uoregon.edu/>
- 5) 吉川和広: 土木計画学計画の手順と手法, 森北出版株式会社, 1975.
- 6) 飯田恭敬・岡田憲夫編著: 土木計画システム分析-現象分析編 森北出版, 1992.
- 7) Goble, R., and Okada, N.: Maintaining vigilance is critical and challenging for disaster risk management: it offers lessons in implementation science; Part I: some general observations, *IDRiM Virtual Conference 2021*, Sept. 2021.
- 8) Okada, N., and Goble, R.: Maintaining vigilance is critical and challenging for disaster risk management: it offers lessons in implementation science; Part I: some general observations, *IDRiM Virtual Conference 2021*, Sept. 2021.
- 9) Okada, N.: Chapter 5 SMART Governance under Persistent Disruptive Stressors to Enhance Community's Dynamic Resilience: Case of Chizu Town, Japan. in (ed. by Shimuzu, M.): *A Resilience Approach to Acceleration of Sustainable Development Goals*, Springer (Forthcoming)
- 10) 岡田憲夫・杉万俊夫ら: 地域からの挑戦—鳥取県・智頭町の「くに」おこし, 岩波ブックレット, 2000 年
- 11) 岡田憲夫: 一人から始める事起こしのすすめ: 地域(マチ)復興のためのゼロからの挑戦と実践システム理論 鳥取県智頭町 30 年の地域経営モデル, 関西学院大学出版会, 2015 年
- 12) Okada, N.: Adaptive Process for SMART Community Governance under Persistent Disruptive Risks, *International Journal of Disaster Risk Science*, Vol.9, pp. 454-463, 2018.
- 13) Okada, N.: Reflecting on over 30 years of research with Chizu Town, Tottori Prefecture and the potential of SMART Governance, *Contemporary Japan RCOJ* (Forthcoming)
- 14) 山泰幸: 媒介的知識人とは何か, 災害復興研究, Vol.11, 2019. https://www.kwansei.ac.jp/fukkou/research/bulletin/detail/saigaifukkou_12.html

- 15) 山泰幸: 語り合う場をデザインする,, 関西学院大学
災害復興制度研究所ニュースレター 46号,2021.
<https://www.kwansei.ac.jp/fukkou/publications/letter/letter.html>
- 16) Okada, N. : Dynamic Processes of Collaborative Action Development :Implementation of the Yonmenkaigi System Method, *Group Decision and Negotiation Conference*, June 2021.
- 17) IRGC: Guidelines for the Governance of Systemic Risks, 2018
<https://irgc.org/risk-governance/systemic-risks/>
- 18) Renn, O., Walker, K. (Eds.): Global Risk Governance-Concept and Practice Using the IRGC Framework, SprWalker, K. (Eds.): Global Risk Governance-Concept and Practice Using the IRGC Framework, Springer, 2007
- 19) Hipel, K., Fang, L. and Heng, M.: System of systems approach to policy development for global food security, *Journal of Systems Science and Systems Engineering*, vol. 19, 1-21, 2010.

(2022.9.30 受付)

PLANNER'S PRACTICAL KNOWLEDGE OF REAL FIELD'S DYNAMICS IN COMMUNITIES BY STRATEGICALLY USING "PROBLEM MPAPS" FOR LOCATING ONE'S POSITION

Norio OKADA, Yoshiyuki YAMA

When "planners" get involved in community's capacity building sites ("machizukuri"), they some-times feel a sense of incongruity. There is a peculiar dynamic when a planner puts him/herself in a live scene. This paper focuses on the following points. When planners are placed on the site of machizukuri, they face (1) unclear roles and (2) non-obvious professional values preassumed. (3) It is also required to temporarily reserve the "planning-theoretical problem-solving orientation," which is the habit of planners. As a result, the planner him/herself (4) experiences the dynamics of his/her standing position and how he/she interacts with it. Then, in what position should planners be in-volved in the community?

This study shows how planners can sense their own position and adaptively learn how to interact by recognizing patterns based on the "Problem Map". As a researcher in planning studies, Okada has been involved in community development in Chizu Town, Tottori Prefecture for many years. His co-presenter Yama is an experienced sociologist and ethnologist with extensive field research experience. Both authors attempt critical thinking brainstorming, and perform cross-validation of the practical knowledge of planners and non-planners.